

フランス語教育におけるT A制度活用の一例

田村 毅

T Aとは Teaching Assistant の略語で、理系の学部を導入されて久しいが、東京大学文学部に適用されたのは1992年秋からである。理系で実験を行う演習では大学院生が学部学生を指導（あるいは補助）する 경우가多く、その指導に対して資格・報酬を与える目的で制度が作られ、それが文系にも遅れて適用されたと聞く。フランス語フランス文学専修（以下仏文、三、四年次学生）では、当初は多少とまどいもあり、どのようにT Aを活用するか試行錯誤を重ねてきたが、本年度（1994年4月から95年3月）によりやく軌道にのり始めたので、ここに経緯を記し紹介する。仏文の予算割当は博士課程の院生2名で、週5時間程度の勤務である。仏文研究室では毎年度交代することを原則とした。

導入された初年度の半年（後期）は、フランス人教師の仏作文や会話演習を補助し、学部学生との仲介役になることを目的とした。しかし、実際には、当然考えられる反応ではあったが、教師側にもT A側にもとまどいが見られ、ある程度授業を活性化する役目ははたせたものの、むしろ教師と学生との直接的なコミュニケーションにマイナスになる懸念も生じた。制度の導入が学年途中であったのも災いした。

そこで翌93年度は、一般の講義演習では十分に時間をさけない発音・聞き取り訓練を学部学生が自主的に行えるように、視聴覚教室（L L）を予定し、希望する学生に、テープなどを使って練習をする際のコーチ役をT Aに分担してもらうよう目標を設定しなおした。かつては、専門課程の学生は、個人個人でテープなどを聞きながら自発的に努力してきたものであるが、ともすればなおざりにされがちであり、教室でもテキストがよく発音できない学生が目立っていた。

当方の考えとしては、できるだけ学生の自主性・自発性を尊び、学生が自分で教材を選び、わからない箇所だけをTAに訊ねる、あるいはその時々フランスのニュースやビデオを流し、それを学生がリピートしつつ発音を自ら矯正すればよい、と想っていた。リピートするだけでも、短時間で集中的にやればかなり効果があがるはずである。つまりTAはあくまで補助で、自宅学習の代わりの場を与えようと思い、TAの二人にもそのように助言した。

しかし、これもこちらの思いこみであり、最初の一、二ヶ月で破綻した。四月のガイダンスでも勧めたせいか最初は多数出席した進学生（三年生）も、急速に減った。TAによれば、この補習授業に単位取得を認めなかったのがその最大の理由だという。自発性に期待をかけすぎたのである。第二には、TAが何も教えてくれないならば授業にでる必要はない、自分で勝手にやればよいと学生は思っているという（本当に自分でやるならばよいが）。塾通いで教えられていることに慣れすぎているのではないか、などと言ってもはじまらない。一理はある。TAの提案で、残った数人に対してもっと初歩的な発音訓練から教えることにした。

初心者ならともかく、発音練習はえてして退屈であり、専門課程の三、四年次学生の関心をひき、なおかつ効果的な訓練を、週一回（100分）の限られた時間枠で行える最適な教材があるのかどうか、それを選べるほどの十分な数の新しい教材は、残念ながら仏文研究室には揃っていなかった。とりあえずは手持ちの教材から選び、どのような方法で学生に教えるのかを考えるとところからTAに任せた。

TAにとっても教材選択は教える上での重要な動機となり、他人（教師）から与えられた教材では興味が半減しよう。TA二人の提案で、各々が自分の考えた教材と方法とで隔週ずつ担当することになった。一つの授業で異なる二通りの学習ができるのも面白いと思い、賛同した。

結果として、残った数人は夏休みが明けて秋になると、他の授業でもその躍進ぶりが注目され、われわれの話題になるほどの効果があった。数人しか残らなくても二人のTAの努力の成果は証明されたのである。

そこで三年目の本年度は、前年の反省をふまえ、より現実的に対処して、私

の名前で演習の授業を一つ増やし、半期ごとに試験をし、単位取得を認める授業とした。教材も買い足した。年間通してほぼ20名前後の出席があり（但し成績は出席を重視するとの条件をつけた）、二人のTAが交互にそれぞれの学習方法で発音・聞き取り訓練を行った詳細は以下に記してある。

このような試行錯誤の結果、TA制度のもう一つの活用として、一種のフランス語学教育実習の側面もあることに気がついた。私はもっぱら相談役にまわり、時折授業をのぞかせてもらっただけであるが、博士課程院生が創意工夫を凝らし、熱意を込めた授業に感動した。三、四年生も非常にまじめに熱心に発音練習をつづけているので感心した。そこで、どのような教材を選び、与えられた時間と生徒数の枠内でどのようにそれを使い、その効果はどうであったかを記録し、報告してもらい、次年度以降の参考にすると同時に、語学教育の資料に役立てば幸いである。

なおTAの仕事は発音訓練の他にも院生ゼミナール（院生が論文・研究内容を報告する会）を組織し、司会するという役目もあるが、この点についてはここでは省略する。

TA名簿

1992年度（後期）： 横山裕人 朝比奈美知子
1993年度： 白井恵一 平野隆文
1994年度： 上田和彦 谷口康之

(1995.1.25.)